

失敗場面における他者の心理的距離と行動が羞恥感情に及ぼす影響

高山朝陽

(香川大学大学院教育学研究科)

問題と目的

恥とは自らの行為や状況に対して、体裁が悪い、品がない、嘲笑に値する、不名誉であるといった感覚から生じる、非常に不愉快な自己意識的情動である (G. R. VandenBos, 2013)。

本研究では心理的距離が近い他者の行動が当事者の羞恥感情にどのような影響を与えるのか、心理的距離が中程度の他者が行動した後の羞恥感情の状態と比較し、検討することを目的とする。

方法

対象者: 大学生 189 名(平均年齢 19.22, SD=1.10)

質問紙: フェイスシートでは性別、学年、学部の記入を求めた。以下の想定場面で感じた気持ちについて、樋口(2002)が作成した羞恥感情の測定項目(混乱的恐怖、自己否定感、基本的恥、自責的萎縮感、いたたまれなさ、はにかみ・もどかしさの7因子)を使用し、4件法で回答を求めた。また、場面における A さん、B さんの行動に対して、回答者が感じたことを自由記述で回答してもらった。

想定場面: 「発表について学生の前で先生に批判された」という回答者全員に共通して呈示する場面 X、心理的距離が中程度の人が行動を起こした場面 Y、心理的距離の近い人が行動を起こした場面 Z の3種類の場面を用いた。回答者全員に共通する場面 X は、樋口(2000)にて使用された公恥系状況場面を参考に作成した。場面 Y、Z は質問紙のパターンごとに他者の行動が異なり、他者の行動は福田・樋口・蔵永(2014)が整理した羞恥を感じた他者に対する観察者の行動(援助、放置、ユーモア化、観察)を割り当てた。また、心理的距離: 中群を「お互いのことは知っているがこれまであまり話したことのない A さん(あなたと同性)」、心理的距離: 近群を「いつも一緒に過ごしている B さん(あなたと同性)」とした。

結果

羞恥感情の測定項目を従属変数とし、他者介入前と介入後の合計得点の変化を比較するため、行動×介入前後の2要因分散分析を行った。

場面 X と場面 Y の比較では、介入前後の主効果 ($F(1, 173)=210.33, p<.001$, 偏 $\eta^2=0.55$)、行動の主効

果 ($F(3, 173)=4.45, p<.01$, 偏 $\eta^2=.07$)、交互作用が有意であった ($F(3, 173)=11.88, p<.001$, 偏 $\eta^2=0.17$)。また、単純主効果の検定を行ったところ、介入後における単純主効果が有意であった ($F(3, 173)=9.55, p<.001$, 偏 $\eta^2=0.14$)。多重比較の結果、①援助・放置<ユーモア化、②援助<観察の順で得点が高く、放置と観察の得点差が有意傾向であった。また、行動における介入前後の単純主効果が有意であった (援助, $F(1, 173)=115.76, p<.001$, 偏 $\eta^2=0.40$, 放置, $F(1, 173)=90.67, p<.001$, 偏 $\eta^2=0.34$, ユーモア化, $F(1, 173)=13.24, p<.001$, 偏 $\eta^2=0.07$, 観察, $F(1, 173)=25.81, p<.001$, 偏 $\eta^2=0.13$)。場面 X と場面 Z の比較では、介入前後の主効果 ($F(1, 173)=188.90, p<.001$, 偏 $\eta^2=0.52$)、行動の主効果 ($F(3, 173)=5.49, p<.01$, 偏 $\eta^2=0.09$)、交互作用が有意であった ($F(3, 173)=16.21, p<.001$, 偏 $\eta^2=0.22$)。また、単純主効果の検定を行った結果、介入後における単純主効果が有意であった ($F(3, 173)=12.69, p<.001$, 偏 $\eta^2=0.18$)。多重比較の結果、①援助<放置・ユーモア化・観察、②ユーモア化<放置の順で得点が高かった。また、行動における介入前後の単純主効果が有意であった (援助, $F(1, 173)=141.76, p<.001$, 偏 $\eta^2=0.45$, 放置, $F(1, 173)=5.36, p<.05$, 偏 $\eta^2=0.03$, ユーモア化, $F(1, 173)=60.97, p<.001$, 偏 $\eta^2=0.26$, 観察, $F(1, 173)=30.20, p<.001$, 偏 $\eta^2=0.15$)。

Table 1 A さんによる介入前後の平均値と標準偏差

	他者の行動				F 値	
	援助	放置	ユーモア化	観察	行動 前後	行動×前後
場面 X	50.80(8.35)	50.27(8.95)	50.85(8.70)	50.41(8.96)		
場面 Y	33.05(10.93)	34.73(12.77)	45.04(14.24)	41.73(10.97)	4.45**	210.33***

左側の数値は平均値、右側の数値は標準偏差を表す

** $p<.01$, *** $p<.001$.

Table 2 B さんによる介入前後の平均値と標準偏差

	他者の行動				F 値	
	援助	放置	ユーモア化	観察	行動 前後	行動×前後
場面 X	50.80(8.35)	50.27(8.95)	50.85(8.70)	50.41(8.96)		
場面 Z	30.34(10.75)	46.33(11.82)	37.87(14.74)	40.63(11.85)	5.45**	188.33***

左側の数値は平均値、右側の数値は標準偏差を表す

** $p<.01$, *** $p<.001$.

考察

失敗場面における心理的距離と行動の違いによる羞恥感情の変化について、2 要因分散分析の結果や自由記述の内容から、設定した心理的距離に関わらず「援助」にあたる行動が当事者の感情を量的にも質的にも和らげる可能性があることが示された。また、心理的距離が中程度である他者の「放置」は「援助」と同等の得点の変化が見られ、質的には異なることが示された。